

近世臨濟禪備忘録

—古月下の一流(一)—

鈴木省訓

問題の所在

禪宗の書『無門関』の第六則に、

世尊、昔、靈山会上に在って、華を括じて衆に示す。是の時、衆皆默然たり。唯迦葉尊者のみ、破顔微笑す。世尊云く、吾に正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門あり、不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す。

とある。これは、「拈華微笑」の話である。釈尊が悟られて仏陀となり、その法を摩訶迦葉に伝えられたときのことである。さらに、歴代の祖師方によって伝えられた法は、印度、中国、日本へと伝来してきたのである。多くの宗派が日本へ渡来し、布教され、どの宗派においても、一家の伝燈を立てる訳である。その中でも特に禪宗は、伝承の証しの「印可」ということを重視する宗派である。

明治の禪匠といわれた南天棒、中原鄧州老師は、自著⁽¹⁾の中で、「禪は

公宗、各宗は私宗」といい、その理由は、印可の有無に言い、禪の伝承、印可というものを高く評価し、また、重視したのである。そのため、明治二十五年に「宗匠検定法」⁽²⁾をあげ、全国にいる印可されたとする師家を検定し、その力を調べようとしたほどである。

この中国伝来の印可をうけ、伝承された臨濟禪は、近世になり、白隠出現によって大きく変化していく訳である。現在の臨濟禪は、十四派⁽³⁾という数の本山を持ち、それぞれの本山独自の開山を立てているにもかかわらず、各本山の有する修業道場での指導は、白隠下独特の形で行なわれている。しかし、明治の頃には、白隠下の修行における見解とは異なるものが伝えられていたとされている。その一つに、「古月禪」と呼ばれる公案禪の一派がある。この一派は、九州に起り、それが関東に伝えられ、鎌倉の地を中心に、鎌倉禪と呼ばれる一派へと展開していくのである。

古来、鎌倉禪を鍋蓋禪、鍋蓋悟りと言われ、白隠下の梯子禪と対比さ

てきた。⁽⁴⁾この鍋蓋禪という言葉の中に、古月禪の特色、白隠禪との違いを見い出すことができる。白隠禪の修行体系は、「法身・機関・言詮・難透・向上・五位・十重禁・末後の牢関」と言われる公案体系の中に、⁽⁵⁾『無門関』・『碧巖録』・『臨濟録』をはじめとする種々の語録の公案を分類し、その公案を学人に課して、室内という法戦場で通していく。そして、最後の公案を通して後、悟後の修行としての聖胎長養によって印可され、師家分上と言われる人物になるのである。

これに対して、古月下の修行は、一則の公案を数年間拈提し、それによって大悟したならば、次の公案へと進むのであるが、白隠下のような公案体系を持たず、公案の数も、数十則であるといったような違いがある。

だが、古月下、白隠下を問わず、印可されたならば法幢をかかげ、弟子にまた法を伝え印可するわけである。ここに、伝統としての禪が伝承されるのである。これが、臨濟禪の教育法である。このような伝統的伝承があったにもかかわらず、現実には、古月禪の法燈は消えてしまったのである。その理由の一つに、白隠が出世したことにより、古月下で印証されたものが、白隠下に参加するといったことが起きたためであると思われる。⁽⁷⁾それは、何故であるかという疑問が出る。さらに、明治の禅匠、禾山玄鼓は、古月下の禅匠、晦巖道廓に参加した人である。晦巖は「晦巖の知らざる字は字にあらず」とまで言われた碩学の人である。この晦巖が、弟子の禾山に「我はこれ豪邁、汝はこれ高邁、ともに常流にあらず」と言い、十年間晦巖に従って学問をした。ある時、晦巖が「老僧の

学海、すでに你が為に傾倒せられ、復た涓滴を遺すこと無し。你、当に去って禪に参ずべし」と言い、梅林寺の羅山元磨（白隠・卓洲下）に参禅させたことが、禾山の伝記に見られる。この伝の中にある「禪に参ずべし」の一文に問題がある。晦巖は、古月系の人であり、晦巖の伝には、「誠拙・淡海・清蔭三師を得。其の蘊奥を極め、遂に淡海の印記を受く」とあり、明らかに古月禪の印可をうけた人である。それが、どのような理由によって、弟子の禾山に「禪に参ずべし」と言ったかである。江戸末期には、古月系に禪がなく、白隠系のみが禪の命脈を伝えていたと考えられていたのであるのか。江戸期の臨濟禪の状況についても問題となってくる。古月禪には、白隠系のような公案体系がないから断法したのか。それ以外に断法した理由はないか、そして、古月禪の特色は何かなど、多くの問題がある。

さらに、『武士道全集』巻七に「武士禅機縁集」（寒松齋、福山老牧述聞記）なるものが収録されてある。そこに、「武士禅機縁之由来」⁽⁹⁾という一文があり、古月下の師家の中に、武士禪の伝承があったと述べられている。この武士禪の内容及び、公案についても明らかにしなければならぬと思う。それは、この武士禪の中に古月禪の展開があると考えられるからでもある。

近世臨濟禪への流れ

日本に伝来した禪は、古来より、四十六伝と言われ、それは、栄西以来、江戸時代の隠元隆琦、興儔心越までに伝燈嗣承したものである。こ

の中で流派として大成していったものに二十四流⁽¹⁰⁾があった。この二十四流のひとつが臨済禅である。この二十四流のうち、鎌倉の建長寺、円覚寺を興した蘭溪道隆、無学祖元らは、来朝僧であり、京都の建仁寺の明庵栄西や、日本曹洞宗の祖、永平道元などは、入宋求法して禅を挙揚した人である。

当時を見るに、来朝僧に対する問法は筆談によって行なわれていたのは周知の事実であるが、この中国と日本という言葉による壁は、時間の経過とともにうすくなっていったであろう。また、入宋僧は、ある程度の語学を学んだ後に渡海したであろう。伝法についての言語の問題は、ならぬ形の形で解決していったと思う。

言語以上の問題は交通機関である。現代の交通機関とは異なり、命がけで中国から日本へと、また、日本から中国へ、そして日本へと渡海したであろう。そこには、唯だ正法を明らかにするといった求道心のみで、身を賭して船に乗りこんだであろう。その結果、四十六伝の禅が伝来したのである。その内、二十四派がのこり、その内、永平道元の伝えた曹洞禅と南浦紹明の臨済禅のみだけが現在も法幢をかかげており、他はすべて断絶してしまったのである。祖師方が苦勞して伝承した禅が断絶してしまったことは、ただ遺憾に思うだけではかた付けることのできない思いがするのは、私だけではないであろう。

臨済禅、現存の一派は、南浦紹明が入宋し、大応派と呼ばれる一派となり、やがて「応・燈・関」の一流の禅となって発展しながら近世臨済禅へと展開していくのである。

「応・燈・関」の一流

大応国師、南浦紹明は、入宋して虚堂智愚(一一八五～一二六九)につき嗣法したのである。南浦は、十五歳の時、薙髪し、鎌倉の建長寺の蘭溪道隆(一二一三～一二七八)の室に投じ、二十五歳の時、諸法歴参の志をたてて入宋したのである。そして、虚堂に侍し、その玄旨を尽して帰朝したのである。師、三十三歳の時である。帰朝後、建長寺、興徳寺(筑前)崇福寺(太宰府)等の移幢し、特に、崇福寺を中心に禅風を挙揚したのである。延慶元年(一一三〇)七十四歳で示寂した。

この南浦の法を嗣いだ一人が宗峰妙超、大燈国師である。宗峰は、弘安五年(一二八二)に播州揖西(揖保)に生まれた。幼児期よりその言行は常人と異なり、辞氣人に迫るものがあつたと言われる。十一歳の時、書写山に登り、戒信律師に師事した。しかし、戒律も大切ではあるが、それよりもその内容とする教理、教理史への研鑽をすべきであると考え、教理等を学ぶことにしたのである。しかし、後に経律論を学んでも、多聞強識の人にすぎない。大丈夫の漢になるには、不立文字、教外別伝の禅に入る以外にないと考えるようになった。そして、京都、鎌倉の諸老宿に参問した。問答は、機鋒鋭く、すさまじいものであつたという。二十三歳の時、鎌倉万寿寺で高峰顕日に相見し問答した。高峰は、その時、今まで多くの求道者を見たが、師のような俊抜な者に逢ったことがない。剃髪し僧となって、禅門の棟梁となるべく修行せよと言って激励した。遂に、落髪受具し、己事究明に専心した。ある夜、坐禅三昧

であったとき、壁を隔てて一僧が、百丈禪師の

靈光独り耀き迥かに根塵を脱す

体露真情文字に拘らず

の語を唱えるのを聞き省悟する所があった。見解を高峰に呈したところ、高峰は、それが真正の見解であり、一家をたてて宗旨をたてよと許した。

その頃、南浦が、太宰府の崇福寺より京都に上洛していることを聞き、京都にのぼり相見し参禅した。しかし、南浦は、すぐに宗峰の見解を許さなかった。南浦は、徳治二年（一三〇七）幕府に招かれ鎌倉に下向した時、宗峰も随従して、参禅弁道を怠らず行った。鎌倉建長寺に行つて間もない頃、「雲門の関字」⁽¹⁾に徹見した。宗峰は南浦に見解を呈したところ、南浦は大いに驚き、「昨夜、雲門大師が、わが室に入る夢を見た。汝は雲門大師の再来である」と褒め称した。そして、真風を挙げよと言いながらも、二十年の聖胎長養を申しわたしたのである。

翌年、延慶元年（一三〇八）南浦は病となり、十二月二十九日、建長寺で示寂したのである。世寿七十四歳であった。

その後、宗峰は、京都五条橋のあたりの乞食の中に在り、二十年間、悟後の修行をしたのである。宗峰が、尊い祖師と今日臨済禅家に言われる所以は、この聖胎長養にある。

正中二年（一二三五）宗論が行なわれた。これは、「正中の宗論」と呼ばれるもので、禅宗を破斥しようと教宗側が企だてたものである。宗峰は、法兄である通翁鏡円の侍者として論戦の矢面に立つて行った。論争

は、教宗側が敗れ、教宗側の代表となった玄慧法印は、宗峰に帰依する結果となった。そして、玄慧法印は、自分の邸宅を方丈として宗峰に施し、後に、後醍醐天皇から寺地の下賜をうけ、伽藍の建立をした。嘉暦元年（一二三六）法堂が落成し、十二月八日、開堂の式典を行った。この寺は、「龍宝山・大徳寺」と公称した。この年は、大応に二十年の長養を申し渡されてから、ちょうど二十年目の年である。これより宗峰は、大徳寺を中心に禅風を挙揚したのである。

建武四年（一二三七）病により、後事を法嗣の一人、徹翁義亨に托し、十二月二十二日示寂した。世寿五十六歳であった。この徹翁の系統は大徳寺を中心に栄えていった。

大応下、徹翁と同門に関山慧玄がいる。関山は、信濃に生まれ、徳治二年（一二〇七）鎌倉の建長寺で南浦紹明に相見した。初め僧名を慧眼といった。相見した翌年、南浦の示寂にあい、その後は、大応下の諸老のもとで修行してのち、郷里の信州に帰り隠栖していた。

嘉暦二年（一二三七）、建長寺開山、蘭溪道隆（大覚禪師）の法要が、建長寺の西来院で行なわれた。その時、関山も出頭したが、その法要の前日、関山はある僧に、現在の天下の叢林の中で明眼の宗師はだれであるかを問うた。すると、その僧は、京都紫野の宗峰和尚こそ真の宗師である。そして、宗峰の機鋒のするどきことを語った。これを聞いた関山は、法要も終わらないうちに、西来院を去り、京都へ向った。この年は、先にも述べたが、宗峰は、大徳寺の法堂の開堂も終わり、道風を天下に靡かせている時である。

大徳寺で宗峰に相見した関山は、いきなり「如何なるか宗門向上のこと」と質問した。宗峰は「雲門の関字」をもって示した。関山は、示された後、すぐに宗峰の室を去り、翌日あらためて入門を願ひ、宗峰の門下となったのである。宗峰のもとにいること二年、ある夜、坐禅三昧にあったとき、突如として関字に徹見したのである。急ぎ宗峰の室に入り、見解を呈したところ、宗峰は手を打ち喜んで「汝は雲門大師の再来である。汝とはじめて対面した前夜、雲門大師入来の夢をみた。いま汝は、痛快に関字を透過した。そこで関山の号を授ける。また諱の慧眼を改めて『慧玄』にせよ」と言つて偈頌⁽¹²⁾を作り、証明として与えた。

その翌年、元徳二年（一一三〇）、宗峰より悟道の印状を授かり、美濃伊深の山奥で聖胎長養していた。大燈・関山二師の行ったこの聖胎長養こそ「応燈関」一流の最後の修行であり、室内で授けられた問題を実地の生活の場で生かしていく修行を行うわけである。その後、大燈が病にたおれたとき、花園法皇は、大燈のあと、だれに問法すべきかを聞くと、大燈は関山を推薦した。そこで、法皇は、関山を招いて、自分の開創した「正法山・妙心寺」（命名は大燈による）の開山第一世とした。関山の接化は非常に厳しく、よほどの上根のものでないと堪えることができないとまで言われるほどであった。多くの門人を容しながら、嗣法の弟子は、授翁宗弼、ただ一人だけである。また、語録もなく、法語として伝えられているものは「慧玄が這裏に生死なし」「柏樹子の話に賊機あり」の二語と、初入の者には「本有円成仏、甚んと為してか迷倒の衆生となる」と問うたと言われるこの語の三語のみが伝えられている。

ある日、弟子の授翁を呼び、旅の支度をした関山は、風水泉とよばれる井戸の側で、しばらく行脚に行くといい、そこで、仏法の由来、訓誡をし、たったままで示寂した。延文五年（一二三六〇）十二月十一日のことである。世寿八十四歳であった。

この「応燈・関」一流の禅は、的伝し、関山から五代目に、雪江宗深が出、その嗣法に東陽英朝、特芳禅傑他数名が出た。この東陽の流れに、盤珪永琢・白隠慧鶴が出、特芳の流れに古月禅材が出てくるのである。

近世臨済禅は、このような流れをうけて展開していくのである。白隠下については、現在の修行道場をはじめ、多くの師家方の室内に於いて参究すべきことであり、多くの論文を読むよりも、より確実に理解できるものと考ええる。しかし、古月下については、すでにその法財は伝承されておらず、その内容、概要を知るには、現存する資料によって知る以外はない。そこで、今回より、古月系の諸師の伝、及び、著述等の整理をしていくことにする。

参考 『禅宗史入門』（サーラ叢書）荻須純道著 講座禅（筑摩書房）他

関山慧玄——授翁宗弼——無因宗因——日峰宗舜——

——義天玄承——雪江宗深——

——東陽英朝……以下は盤珪・白隠の系統となる。

——特芳禅傑——大休宗休——太原崇孚——

——東谷宗果——鐵山宗鈍——大室祖丘——

——心嶽玄精——龍峰道哲——節巖道圓——

——腎巖禅悦——古月禅材……以下古月下の流れ

※賢巖禪税

元和四年（一六二八）一歳

ある夜、母が、三すじの光が懐に入るのを夢に見て身ごもった。この年の冬、後州臼杵（大分）に生まれる。俗姓は土屋氏。父は医師で、本多忠義に仕えた三百石取りの家である。生まれた時、占い師が、日の吉凶などを占うと、占い師は、この子供には、他の人になく相があり、永く家におくことはできないと言った。年が行くと聡敏である。

多福寺の雪窓は、幼少の師をみてより非常にかわいがり、将来、宗門を興す人物になるとみて、弟子にしようとしたが、適男であることを理由に、父親は出家を認めなかった。しかし、雪窓の熱心さと、生まれた時の占い師のことばを思い、ついに出家を認めた。

寛永十一年（一六三四）十七歳

八月十二日、雪窓のもとで出家した。この時の師は「某甲、出家す。衣食住の為にせず。幸に、吾が志を成さば、願くは、和尚の化を輔けん」と述べ、自己の出家する心中を吐露したのである。

その後、都を中心に、東国等を歴遊して、美濃に行き、愚堂に参じた。愚堂は、他と異なる人物である師を見て、鉗鎚を加えた。師は、公案をかかえて修行し、その間に省する所があった。

慶安二年（一六四九）三十二歳

雪窓が病氣となる。稲葉侯が、和尚の法を嗣承するのはだれかと聞くと、雪窓は、だれもいないと答えた。侯が、禅悦と師の名を言うのと、雪窓は、「彼は文字の学問は非常にすすんでいると聞いているが、見

性したということは聞いていないので、私を嗣ぐことはない」と答えた。雪窓は、師を印可することなく示寂した。

雪窓の示寂を知り、急ぎ多福寺にもどる。同門の者たちは、師を雪窓の的子と言ったが、自分の師である雪窓が認めなければ、自分からの子であると言うことも、認めることはできないと同門の言葉を肯わなかった。しかし、雪窓に的子として認められなかったことは、師にとって悔まれることであつた。これについて、師の伝には、

然悔_レ不_レ承_二師印_一。怨恨逼_レ胸とある。

慶安三年（一六五〇）三十三歳

元旦の祝聖の時、焼香の香が、香爐の外に落ちたのを見て豁然と省悟した。

その後、諸方を渉歴し、伊予の大隆寺の節巖道円（一六〇七～一六七五）に参じた。

節巖に偈を呈した。

言前に旨を失するも、迷猶は在り

当下に機を投ずるも、悟亦た無し、

笑殺す、人間鈍癡の漢

従来、外に向つて工夫を作す

この偈によつて、節巖より親しく印訣を稟けたのである。

節巖は、自分の後席を嗣がせようとした。師は、多福寺を嗣ぐことを理由にこつたのである。

承応二年（一六五三）三十六歳

六月三日、多福寺に視篆した。

万治元年（一六五八）四十一歳

始めて『輔教編』を講じる。

秋八月、長崎の崇福寺に行き、道者超元（？～一六六〇）と問答を行う。応対に滞ることがなかった。また、隠元隆琦や木庵性瑫に謁す。多福寺にもどってからの修行は、非常にはげしく、睡魔が起ると、もの所に香をたいて睡魔をはらって坐禅をした。

越前、大安寺の大愚宗築（一五八四～一六六九）は、師の外護者である越智侯に、吾が宗を起す人物は腎巖である旨を書簡に託し、それを読んだ侯が非常に喜んだという。また、侯は、妙心寺に端世することゝを推めたが、師は固辞した。

万治二年（一六五九）四十二歳

妙心寺開山、開山国師三百年の遠諱にあたり、上洛し、上堂説法する。

寛文元年（一六六一）四十四歳

秋八月、多福寺で『首楞嚴經』を講ず。

寛文二年（一六六二）四十五歳

妙心寺に行き、微笑塔を拝塔する。帰郷の折、黄檗山に行き、隠元に再見した。木庵性瑫（一六一一～一六八四）は首座として、龍溪性潜（一六〇二～一六七〇）、鐵崖等も住していた。

師を懇留したが、辞して下山した。

寛文四年（一六六四）四十七歳

肥後、河尻の大慈寺（曹洞宗・寒巖派）の住持である雲山愚白（一六一九～一七〇二）が結制を行う。愚白は、師を堂頭と同じ位に置く。師、垂誠を説き、僧俗に授戒をする。

寛文十年（一七六〇）五十三歳

中津、真応寺の請で『大乘起信論』を講ず。

能仁寺では、『信心銘』を講ず。

多福寺では、『梵網經雲棲発隠』を講ず。

七日間の期日で懺摩を修した。

寛文十一年（一六七二）五十四歳

城北に一字を建立し、一刀三礼し、観音菩薩を手刻し安置する。

延宝五年（一六七七）六十歳

予（四国）の正眼寺の請に応じて『修正了義經』を講ず。

播州・摂津・河内（岡山・大阪）の諸州の名師を歴訪し、上洛して妙心寺に詣る。

南山祖團（妙心寺二〇九世）の入寺に際して、厳しきことばで励ます。

延宝九年（一六八二）六十四歳

四月、寺職を嗣法の弟子、大機祖全（一六四七～一六九九）に渡し、山庵に退休した。山庵は、白杵城の南に位置していた。そこで、動静二境の定力を常にねり、活三昧の生活をしていた。

貞享三年（一六八六）六十九歳

十一月、府主の高祖の遠遠で、拈香、入室、垂示、普説を行う。

元禄三年（一六九〇）七十三歳

秋、竹田城主、源久恒に宗要を問われ、師それに答える。城主は、非常に喜ばれた。

元禄七年（一六九四）七十七歳

府主、越智右京兆の病氣を見舞う。

府主病死する。

元禄九年（一六九六）七十九歳

秋、師、病氣となる。

十四日、祖全、常に侍坐する。

十五日、月桂和尚、府主、見舞に来る。

十六日、弟子が遺偈を乞うと、師、しかって言うのに、「未後の一句を聴こうとするならば、自分の平生の姿を見ろ」と言って坐脱した。

山庵の後丘で荼毘にし、そのあとに塔を建てる。

嗣法の弟子として、古月、定山、大機、頑極、濟宗、柏林、竺雲、律堂、延命の薦首座、琉球国の燈首座などをあげている。

著述は、語録六冊、法語集二冊が多福寺に秘在してある。

宝永四年（一七〇七）四月二十日、朝廷より諡号を賜う。「仏燈明覺禪師」と賜号される。

ただし、黒衣の僧で諡号をたまわった最初である。

師は、伝中に「緒餘廣通三衆枝」とあり、自像等、画くこと精巧である。自像などは、今にも動き出しそうであったという。また、仏像を手刻し、法衣を裁縫したりもした。

また、詩偈もすぐれていたという。

※古月禪材

寛文七年（一六六七）一歳

両親が文殊菩薩を信仰し、男子が生まれることを祈る。ある夜、童子と美しい玉とを飲む夢を見た。そして懐妊し、九月、日向（宮崎）に生まれる。

俗姓は金丸氏。

延宝元年（一六七三）七歳

瑞光院にでかけ、梵唄を習う。他の子供とは遊び方が異っていた。ある日父母は、松厳寺に行き一道禪棟に会う。両親は一道の温容なる姿を見て帰依した。そこで、師を一道のそばに置き仕えさせた。

延宝四年（一六七六）十歳

師、自ら出家を願い、一道によって剃髪し出家する。

その後、ある日、『楞嚴経』を読んでいる「汝、三昧を修し、本と塵勞を出す。姪心除かざれば、塵出すべからず。縦い多智有りて禅定現前すとも、もし姪を断ぜざれば、必ず魔道に落つ」と云うに至って、大いに感激し、仏前にひざまづき拝し、誓いを立てた。終生、初志を通し、仏戒を堅持し、違犯せずことを誓った。

元禄二年（一六八九）二十三歳

慈光寺の梁巖志湛（妙心寺二六九世）の爐鞴が峻烈であることを聞き、行って、薫陶を受けた。

制間になり、多福寺の賢巖禅悦に相見し、日夜参究す。安閑として
る暇もなかった。

元禄六年（一六九三）二十七歳

本師や父母の許に帰り、再び多福寺に行き、寝食を忘れ、数年間修行
した。

元禄十二年（一六九九）三十三歳

黄檗山の千駄性佉（一六三六～一七〇五）が三壇戒会を開き、多くの
人に戒を授けた時、師も登壇し具足戒を受けた。

元禄十三年（一七〇〇）三十四歳

紀州の禅林寺の大洞慧柏（妙心寺二八六世）の請にに応じて『楞嚴經』
を講ず。

元禄十五年（一七〇二）三十七歳

再び禅林寺の大洞の請によって『碧巖集』を評唱した。

解制後、紀州の海蔵寺でたまたまある本を見ると、そこに『大般若經』
六百卷の写経の功德の深いことが書かれており、自らも書写の願を
発した。

元禄十六年（一七〇三）三十八歳

法兄である英山の命により、止むを得ず、大光寺の補佐として帰山し
た。山門を再建し、禪庵を再建した。四、五年にして、荒れた寺宇
を再興した。

宝永四年（一七〇七）四十一歳

島津惟久公の命によって、大光寺に視篆する。ついで、新たに、知又

軒という一庵をつくり、終焉の地と定める。

宝永六年（一七〇九）四十三歳

檀越、宗恕居士一百年の遠譚により、『金剛經』を評唱し、居士の冥
福を祈る。

宝永七年（一七一〇）四十四歳

『大般若經』の書写を始めた。そして扶助する人三十名を得て、二年
間の歳月をかけて終了した。

また、大蔵經を求める志を立てる。妙句尼が亡夫のために、此の願を
助け、諸檀も浄財を出し、全蔵六十函、傳大士二童の像とともに、舟
にて日向に至る。尼の希望により経蔵を建てる。

享保三年（一七一八）五十二歳

大光寺を退居しようとする。その計画を島津公が知り、米五十石、
山林若干を知又軒に寄付した。

享保四年（一七一九）五十三歳

『梵網戒經』を一般の人の為に講ず。

享保五年（一七二〇）五十四歳

知又軒に退居する。女人の門に入ることを許さず。

享保六年（一七二一）五十五歳

鳳源寺にて結制。愚極□泰が『梵網戒經』を講じ、師は参禅を主に行
った。

甲斐の慧林寺の請に応じて冬期結制。『円覚經』を講ず。大会終了後、
江戸へ出て、島津公を尋ねる。帰る途中、延岡公の請をうけたが、断

わり帰山する。

十一月、島津公の命により知又軒を修理増築し、落慶。知又軒を寺に改め、僧堂および余堂を建て、山号を「天寿」寺号を「自得」とし、師、開山第一世になる。

享保九年（一七二四）五十八歳

寺が火災にあい、僧堂以外はみな灰となった。しかし、幾許もなく復興した。その眺めは、むしろ旧観より勝っていた。これらのことは全て、外護の力によるものである。

享保十八年（一七三三）六十七歳

さらに小室を構え「骨清堂」と名づけ、そこに退居した。自得寺のあとを弟子の禅興に委ねる。

元文四年（一七三九）七十三歳

自得寺の山門を創建す。

この前に島津公が逝く。「自得寺殿」と号す。この山門を建立するに、惟久公の嗣子、忠就公は、父・惟久公の命により、浄財と良材を喜捨する。

久留米の有馬頼僊公が、師を礼し、一寺建立し、開山にと請した。

延享元年（一七四四）七十八歳（宝保四年とも）

正月、久留米に従者十数名と共に行く。久留米の町に入ると男女が、師を一目見ようと集まり、道を歩くことができないほどのありさまであった。

梅林寺にて、有馬公に謁見する。

二月二十五日、寺院建立の地を定め、山号を「慈雲山」、寺号を「福聚寺」と決める。地鎮祭を行い、後、祝膳となったとき、師の膳に三滴の甘露が降り、小さなつぶとなった。役人が、これを侯に献ずると、侯は、師の高徳であるあらわれだと言い喜んだ。

師、日向に帰る。この際、有馬公は、殿堂の図と師の画像を贈る。

有馬公は、師が日向に帰られても、使いを遣わし、厚く帰依していた。また、師の寿像二幅を袂背して贈る。師、自ら讃をして自得寺と福寿寺に置く。

寛延元年（一七四八）八十二歳

大龍寺の請に応じて、法嗣である翠巖従真（一六八三～一七七二）に『臨濟録』を代講させ、師は、参禅を主に行った。

寛延二年（一七四九）八十三歳

鹿兒島、志布子の大慈寺の請に依じて二十日間の法施を行う。開山、仏智大通禅師（玉山玄提・南禅寺無関の法嗣）の四百年諱を行う。終つて骨清堂に帰る。

福聚寺ほぼ完成する。

十月、梅林寺に到着する。有馬公は寺禄を定め、二百五十石とする。

十二月三日、入寺開堂の式を行う。すべて古例にしたがい式を行う。

寛延三年（一七五〇）八十四歳

長州の長府侯の請に依じて、滔天玄鱗（梅林寺七世）と結伴する。

下関、日頼寺の梁雲□園が師の侍者となり、化儀の補佐をする。法施十七日間。

太宰府天満宮の小石をもち帰り、福聚寺の鎮守としてまつる。

寺内に小室を構え、「済松軒」と名づける。

有馬家が、暹羅国で作った、釈迦、迦葉、阿難の三古像を入手し、福聚寺の本尊とした。

僧堂を建て、選仏場と名づける。

八月、島津公、自得寺殿十三回諱の法要を行う。

妙心寺より使者が来て、妙心寺への視篆を勧請される。有馬頼僊公も視篆を勧めたが、師、自ら徳の薄いこと、体の衰えとを理由に断わる。生涯、黒衣の僧であることを願うためでもあるという。

宝暦元年（一七五一）八十五歳

二月、福聚寺に帰る。韋駄尊天に点眼する。

四月上旬、病氣となる。東丘に、執事、侍者を引き連れて登り、自分の埋葬する所を伝え、そこに塔を建て、塔名を「寂照」と名づけるように命じた。骨は、自得・福寿の両寺に分骨するもよしとした。

師の病状を気使い、江戸より有馬侯出立し、途中にあって、使いを出して慰問したり、二人の医師に命じて師の看護をさせる。

四月二十四日、辞世の偈を書す。

好不啣喙 八十五年

翻身一擲 棒殺青天

二紙に書き、福寿・自得の両寺に与える。

二十五日、梁溪禅興を太宰府の廟に遣わし、現世護法の神思に感謝させる。

午後になり、衆を集め遺誡する。

子の刻、示寂する。世寿八十五。茶毘にふす。葬儀の間、紫雲たなびき、式終了と同時に消えたという。

『四会語録』四巻がある。また、福聚寺には、多くの資料がのこっている。

なお、古月伝に関しては、『古月禅材伝』なる小冊子があり、その内容は、次の機会に譲ることにする。

〔註〕

1 『南天棒禅話』中原鄧州著、他

2 秋月龍珉著『禅入門』三一書房

最後に「宗匠検定法」の本文をのせてある。

3 妙心寺派（京都）末寺三四〇〇余ヶ寺

南禅寺派（京都）末寺四二〇余ヶ寺

天龍寺派（京都）末寺一〇〇余ヶ寺

相国寺派（京都）末寺一〇〇余ヶ寺

大徳寺派（京都）末寺二〇〇余ヶ寺

東福寺派（京都）末寺三七〇余ヶ寺

建仁寺派（京都）末寺七〇ヶ寺

建長寺派（鎌倉）末寺五〇〇余ヶ寺

円覚寺派（鎌倉）末寺二〇〇余ヶ寺

永源寺派（滋賀）末寺一三〇余ヶ寺

仏通寺派（広島）末寺四七ヶ寺

国泰寺派（富山）末寺三五ヶ寺

方広寺派（静岡）末寺一六〇余ヶ寺

向嶽寺派（山梨）末寺六〇余ヶ寺

4 「夫れ鎌倉坐禪とは、一則の公案を以て修し、禪定を第一となし、鶴林下の修行は一則の公案にて見性を得れば、それより法身、機関、言詮、鶴透難解の公案を一々透過させ、其より五位、十重禁戒を一々修得し、尚進んで悟後の修業を為し、後又拈弄等、微細の上に微細を尽し、大機大用を発得するを得て、始めて已事丁畢となす。（中略）されど鎌倉禪者派は、之を鶴林会下の梯子悟りと罵る。之に対して鶴林下修業の社流は、鎌倉の鍋蓋悟りと罵る。是れ当時實際の評語となす。」

以上の一文は、清見寺坂上真浄老師の自伝『忘来時路録』にあると、川辺真藏著『近世禅僧伝』にある。これから白隠下と古月下の禅風の一端をはかり知ることができる。

5 註2、また同著者『白隠禅師』『一日一禅』上・下（講談社現代新書）に、公案体系をわかりやすく説明し、公案の内容まで示してある。

6 公案の数に関しては、一口に千七百則というが、実際には、それぞれ、師家の室内によって異なると言われる。大燈国師は、百二十則にて終了したといわれている。白隠下における隠山派、卓洲派においても異なると言われている。東京、白山道場の南華室・小池心叟老師は、自著『まあ坐れ』の中で、実際に与えられる公案の数は七百則ぐらいと言っている。師は、卓洲下の人であり、現建仁寺派管長、竹田益川老師の法嗣である。

7 白隠下へ移った古月下の諸師については、『妙心寺六百年史』などにその名をあげているが、これに関しては、後日、何らかの形で発表する予定である。

8 『近世禅林僧宝伝』第三卷、思文閣

9 入道参禅記（禅興藏書第一巻跋）ヲ按ズルニ、武士禅ノ機縁ハ、前後両期アリ。

天正已前ハ、先ヅ武門ノ入道輩ノ機縁ヲ以テ、葛藤ト為シテ商量セシメ、而テ後ニ仏祖ノ機縁ヲ以テ、鉗鎚セルモノ多シ。武門ノ入道輩ノ機縁ハ、湘南葛藤録ニ記スル如キモノ是也。天正已後ノ宗匠ハ、武門ヲ接化スルニ、初ヨリ専ラ、仏祖ノ機縁ヲ以テ提撕スル者多シ。由テ武家入道ノ機縁ト葛藤ト為シテ商量スル者、漸ク稀ニ成レリ。是ヲ以テ関東叢林ニ於テ、武士禅三百則ノ名目スラ、忘却スルニ至レリ。白隠已後ノ宗匠ニ、武士禅ノ機縁ヲ提示セシ者アレドモ、是レ室内ノ要諦トシテ、拈セシムル趣旨ニ非ズ。学者ガ仏祖之機縁ニ参ジテ、其難透ニ久困セシ時、其緩和策トシテ、他ノ岐路ヨリ、本道ニ入ラシムル手段トシテ、古武士ノ旧機縁ヲ、商量セシ時、故ニ白隠派ノ師家ノ室内ニ於テ、或ハ武士機縁ヲ挙示スルコト有ルモ、通常十二三則ニ過ギズト謂ヘリ。其二十余則ヲ拈提セシムルハ、唯ダ蒼龍窟ノ室内アルノミ。「然レドモ古月派ノ師家ニハ、從來武漢ニ接スルコト多キ者アリ」。由テ室内ニ、武士禅ノ伝統（蘭山秘記ノ金綱圖）アリテ、居士輩ノ希望ニ由レバ、百余則ヲ商量セシムルコト有リ。叢林雜記及ビ武家道心集等ニ、武士禅三百則ノ語アルドモ、武士禅ニハ、類則多キ故ニ、玲利之漢ナラバ、七十二則ヲ透関スレバ、三百則ノ端的ヲ領含スルヲ得ベシ。故ニ古月派ノ師家ノ室内ニ於テ、商量セシムル武士禅ノ葛藤ハ、百八則ニ過ギザルモ、其徹悟スル所ハ、三百則ノ透関也。明治已後ニ於テ、武士ノ機縁ヲ商量セシムル師家ハ、白隠派ハ真浄老漢、古月派ハ、舜庇老漢ニ至テ絶ヘ、現代ハ、之ヲ室内ニ挙示スル師家アラズ。由テ近年ノ居士ハ、入道参禅記等ニ載スル武士機縁ヲ知ル者少シ。武士禅ノ機縁ヲ商量スルコトハ、天正已後漸ク衰微シテ、白隠已後ノ叢林デハ、殆ンド閑却セリ。由テ明治維新ノ時代ニ際シ、薩長土肥等、諸州ノ武家

ヨリ、彼等ガ熟知スル所ノ武士禪ノ機縁ヲ諮問セラルモ、吾門ノ師家、之ヲ応答スルコト能ハザルモノ屢バ有リ。然ルニ洞門ノ奕堂(管長)環溪(管長)穆山(可睡翁)等ノ諸禪師ハ、能ク武士機縁ヲ熟知シテ、顯官武豪ノ諮問ニ応対セリ、又タ吾宗師ニ参ゼシ武士機縁ノ念仏禪ノ如キハ、吾門ノ師家ガ、其話頭ノ縁由ヲ知ラザルニ、行誠(増上寺)徹定(知恩院)等ノ諸上人ハ、武士禪ノ念仏機縁ヲ能ク詳知シテ、当時ノ商官武將ヘ明細ニ語レリ。然レドモ他門ノ諸師ハ、単ニ武門ノ機縁ヲ説話スルノミ。其商量ノ端的ニ至テハ、敢テ避ケテ言ハズ。蓋シ室内ノ事ハ、各家風アリテ、容易ニ饒舌スベキモノニ非ル故ナリ。

10

- (1) 明庵榮西 建仁寺 (千光派)
- (2) 希玄道元 永平寺 (日本曹洞宗)
- (3) 円爾弁円 東福寺 (聖一派)
- (4) 心地覚心 興国寺 (法燈派)
- (5) 蘭溪道隆 建長寺 (大覚派)
- (6) 兀庵普寧 建長寺 (兀庵派)
- (7) 大休正念 浄智寺 (大休派)
- (8) 無象静照 浄智寺 (法海派)
- (9) 無学祖元 円覚寺 (仏光派)
- (10) 一山一寧 南禅寺 (一山派)
- (11) 南浦紹明 建長寺 (大応派)
- (12) 西磡子曇 建長寺 (西磡派)
- (13) 鏡堂寛円 建長寺 (鏡堂派)
- (14) 霊山冥隠 建長寺 (仏慧派)
- (15) 東明慧日 建長寺 (東明派・曹洞宗)

11

- (16) 清拙正澄 南禅寺 (大鑑派)
- (17) 明極楚俊 南禅寺 (明極派)
- (18) 愚中周及 仏通寺 (愚中派)
- (19) 竺仙梵僊 建長寺 (竺仙派)
- (20) 別伝明胤 建仁寺 (別伝派)
- (21) 古先印元 建仁寺 (古先派)
- (22) 大拙祖能 建長寺 (大拙派)
- (23) 中巖円月 建仁寺 (中巖派)
- (24) 東陵永瑛 南禅寺 (東陵派・曹洞宗)

12

鎖断路頭難透処 寒雲長帶翠巒峰
 韶陽一字藏機去 正眼看來隔万里
 右為慧玄藏王賦関山号
 嘉曆己巳仲春 龍峰山妙超書
 (妙心寺所藏)

13

関山は、大燈の直系と当時みられていない。それは、大応・大燈の禪は、大徳寺を中心に行なわれており、大燈の後席を薫らしたのは、徹翁義亨である。直系といえは、この徹翁の系統になるのである。しかし、関山下に、愚堂東寔(至道無難―道鏡慧端―白隠慧鶴)が、妙心寺に出世したことにより、「応燈関」一流の禪と言われるようになったのである。大徳寺で沢庵が活躍したのは、愚堂出世の前であり、沢庵の示寂した後、愚堂が妙心寺に出世するのである。